



故鄉塚

德北郡上

池田魚橋

池田魚橋



席

瀧北歌上なる賑ふのぬりや
一巻といふを鳥んと年ら流のむね
なりしらあさし——末を秋代
此より城をふく東麓ふの林下松屋
の境より彼古々の経舟とくはこ
る魂とくくられしを金くはたし
ふの位を所りしをねとくはたし
ぬれよりの地いふなり川河り

昔物く四時の縁をこく
くをくくくくくくくくくく
凡物の具も亦くくくくく
くくくくくくくくくくく
作くくくくくくくくくく
くくくく

寛文曆九

庚辰

秋

子夜坊

下



歿仙行

翁

古くは暁の緒ははる年の暮

あふふえりて移るるちよも

行仮名よきとせぬうひの甲斐て

ふ花柳はあこるる物よし

縄のうしろらよぬい橋をり

小舟の丸のちり

眠矣

五絶

二狂

五絶

三絶

二日ふらふに
Aの巻も

大主人

祈し

石

〇

△

△

〇

欠

坊

在

法

勤

欠

坊

狂

縁者も

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

法

勤

狂

坊

欠

法

勤

狂

後の名を統一

金狂く曲らぬ家名を立し
仲人ハ只今はあつり
か、漆の作ももよよと日
トツて、いふもいふも
苦旅屋の高きうらよ後
布施よ、後のまゝ
月影のそれ程はゆゑも
一羽さうく、晴のまゝ

坊 免 漆 在 坊 免 漆

物さ知へ秋も新地
ちんよまのらや美
活く乳、いぬもけさ
物のもよはれみ里の川舟
度も又、いふり、度
徳、いふ、いふ、いふ

坊 免 漆 在 坊 免 漆

後身

五流坊

年々よきもあつらん古今歌
深き水もあもるもあもるも
深き水もあもるもあもるも
深き水もあもるもあもるも
深き水もあもるもあもるも
深き水もあもるもあもるも
深き水もあもるもあもるも

睡負
松皮
石落
二北
吊芳

心ゆく移の世も明き

一翠

軍書ハ

壹云

家あるも

二花

若かりし

三泉

初記のよ

三劫

奥の院を

坊

今ハ名の

負

久ハ

友

由る事もせぬ物屋の子と一
海より橋へ懸れ来る道
何れも存したる友の体
まねかふ旅の田圃引
木のるく細月と月と
河又遷の凡のこ
肩をふとの志やよは
うハ信りてとる質の
清 泉 花 山 堂 春 北 流

をの中は及理よ此の
あゝんく長宗とれ
平 坊

心

注の二より一 孫の冠と云ふは

心もこれと云ふは孫と云ふは孫と云ふは
心もこれと云ふは孫と云ふは孫と云ふは
心もこれと云ふは孫と云ふは孫と云ふは

心

古くは心と云ふは心と云ふは心と云ふは

古くは心と云ふは心と云ふは心と云ふは

心

古くは心と云ふは心と云ふは心と云ふは

心

心と云ふは心と云ふは心と云ふは

心

心と云ふは心と云ふは心と云ふは

心

心と云ふは心と云ふは心と云ふは

心

心と云ふは心と云ふは心と云ふは

心

心と云ふは心と云ふは心と云ふは

心

心と云ふは心と云ふは心と云ふは

心

心と云ふは心と云ふは心と云ふは

心

心と云ふは心と云ふは心と云ふは

心

日向の原は自然の古々塚 二龍

此も実もきよしのふを梅もは 斗考

廟も高きをそめ古々塚 右合

新くくよのまや梅も秋の凡 塚有

其の徳は家やふはれ古々塚 馬助

終上の賑負ふらたは塚の遠き成
はくちの

五年 兎水

夏も月も終らん古々塚

終り

賑負

虫もあふむと帰る古々塚

其の向新とよあよ 七月 馬助

そらこの春家の終も秋の 塚有

何やら曲家と春は向の 馬助

鹿は子解く言はぬ所も 松友

まらうはくちとあつと 馬助

朽らぬ交りて望みのしる牛

一羣

孝りよらぬ母もふこく

二死

判心も改りてははは意を

壺ふ

算手ゆりの投りしし

馬泉

嘆記し日記のそと物指し

二北

所往のそりも未だのおぼ

負

少くもゆきもあまも止りては

坊勃

朔日よりくる市の小者

坊

少落りし雲のやぶれがし

凌

権理ふれ者端あり

差

恨りも天和のなれやそん

青

歯ふあふよの成る合を流

登

何より流はく月の斤响り

犯

細い所あけ鴨こ胆も

山

大少く今んと書くとメるや

泉

そそく日傍と見えし

北

くららあふれとてははは

坊

秋の夜は静か

諸国四季歌

柳の枝をよけたる秋の音 東波
 横のよよとせし心も交の月 秋鳥
 子日かや東海からの清き水 相良
 と釣舟の思ふも 秋のそよ風 高田

白くく月の旅よ静かな 美見
 星の光もや秋の風 松朝
 を兼やそれけりる秋の音 白観
 一羽二羽とる物も所も 逸南
 橋の音も响ひんか 交風
 花の秋の指し知る蝉も 青塚
 山は山とて 系列
 星合とるの月も 高田
 春の物も 高田

空のしほをくちねおのゝあはれ
むらさきもやうなはと杖とほろけり
物も早もや舟の遊びもあはれ
物も早もや夕初ハ世とくもあはれ
まゝのハこふもあはれ
傾城と別道ハあはれ
何れもはつたは初初集
月乃は風と笑とこもあはれ
冬移しははれぬもあはれ

菫
帆二
松馬
言
三無由
望子
白足
杜文
杜年

小娘くちねをくちね
火煙もあはれ
何れもはつたは初初集
月乃は風と笑とこもあはれ
冬移しははれぬもあはれ

菫
帆二
松馬
言
三無由
望子
白足
杜文
杜年

桂

あけくささき月かたりわきん

香光

ゆき雲らうふのまは法のはるる

友信

立千のまうらハ節さねん

九如

節まのまもさるるさくふ

大匠 隆文

松のまゆさるく川もる虫

尾村

好まらあふまき思ふまは

馬云

言のまよわたり節あき

尾村

梅(あ)さるハまふまは

東李

鳴く川やち鶴ともゆる人のも

かきせいの 兼光

求うぬ月あふ秋まはるる

うら

毛くしうまてはあは

尾村

ふ利と病ははらふる大徳

江声

切法の際あふく蠅や小六月

守柳

大根と味の身さるる

西青

空明く涼凡くはまのち

天 知云

糸の葉はむらうまゆる

香光

其の似も鳴くうらま

柳

福極やうらまの

香光 香光

傘さすはたさる所へ河の

及持

中言ふ河跡ふかへりて月

遊子

畑女の面を少くも挑つて

瓢箪

汲るもく髪をくぬのゆるる

相平

麻をくぬはては様へは来た

文川

是くても羽をくぬや滝

喜五

是くてもくぬはては様へは来た

伝次

是くてもくぬはては様へは来た

和巾

河跡や海へぬたはきり

跡地

おちたや海へぬたはきり

し雲

初時を望みたるはたの白目

魚群

云と訓し目と遊つてぬたはきり

ゆ支

吹とくはくくくくや萩の家

巴文

豆粒や垣を越えてぬたはきり

ト菜

川橋や初を望みたるはたの

李東

掃帚をくぬはては様へは来た

市音

兜地はたのや柳の葉の

道好

西瓜を六月秋と賣り

高好

そよよ氷をまねても夏の月

紅團

涼し〜夏とよむ〜橋の上

わ舟

岸の波や押した舟の返り文

草花

名月や梢〜はまのまじり

梅院

十六夜や〜梢の影の今

夏夜

石舟月おぼろ〜川にひら

文夜

名月やき〜梢の影の今

草花

光る地のゆ〜はるや鏡月

児尔

とまね家影の灯のら〜とまね

馬紅

秋押成神の折を折るを〜

赤明

物あり〜葉の舟を〜と折る秋

呂林

河う〜と〜と〜と〜と〜と〜と

如葉

川舟の影〜舟を〜と〜と〜と

心巾

と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

如毫

秋はよの〜細い〜と〜と〜と

己交

折りや〜舟を〜と〜と〜と

春花

と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

空流

藤花

赤明

をよきやもよき後よきとくし

アツタ 船乗

ふれはのほろけの月のまじし

ちね 子平

をるゝ何となくし里の秋

花見 忍推

錦川のふれ凡もききもかた

志之

又月もかた月もくそもる後のま

木北

くはくはや嬉しふれはの凡島

女平 古柳

物形やおの病つとよしき

小川

船立やゆきとえれぬあな

東本 又長

ふれくし物もふれくしあ

五虎

物形やふれはの凡島

吉記

まはるやゆきとえれぬあ

白記

ふれくし物もふれくしあ

傘帆

まはるやゆきとえれぬあ

山車

まはるやゆきとえれぬあ

和歌

まはるやゆきとえれぬあ

花見

川舟やまはるの春の水もれ

東本

船形やおの病つとよしき

唐紙

船形やおの病つとよしき

船乗

葉の影や秋の風よとて思ふ

望月

舟の遠らき月の影を

三記

信じて入接し月を

牛渚

山もや吹れり月を

杜川

その影を何と今も

正業

吹ぬ日も即ち

正業

松を知らぬも

羽衣

おの影を吹ぬ

汝伯

ちる時も是れ

西望

梅の影や

全小

冬を梅を

青圃

山を

有光

吹れぬ

斗哉

葉の影や

山成

その影を

大石

葉の影や

杜考

あつた

北而

あつた

半若

花影もも葉のゆきや 隆の春 昌 花水

春屋も入りてさくら 又 又

ゆりあけく排打見返し 物新 常家

明日も又し 早 早

系記の中 の 牡丹 の 花

まがしよ の 花 の 花

小の芽 の 芽 の 芽

去り の 花 の 花

茶の花 の 花 の 花

水 の 花 の 花

子 の 花 の 花

昔 の 花 の 花

此 の 花 の 花

暖 の 花 の 花

藤 の 花 の 花

水 の 花 の 花

同 の 花 の 花

花 の 花 の 花

昌

又

物新

早

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

澄波今宵の月を照らす
澄波 今宵の月を照らす

世は河の流るる如く
世は河の流るる如く

けつるに河の流るる如く
けつるに河の流るる如く

秋の月やあはれなる月
秋の月やあはれなる月

葉落や蟬の鳴るる如く
葉落や蟬の鳴るる如く

柿の月やあはれなる月
柿の月やあはれなる月

夕鳥の鳴るる如く
夕鳥の鳴るる如く

空の月やあはれなる月
空の月やあはれなる月

かしの葉の落ちるる如く
かしの葉の落ちるる如く

水也や一葉二葉八葉し
水也や一葉二葉八葉し

秋の月やあはれなる月
秋の月やあはれなる月

春中から日の暮るる如く
春中から日の暮るる如く

秋の月やあはれなる月
秋の月やあはれなる月

秋の月やあはれなる月
秋の月やあはれなる月

眠るに秋の月を照らす
眠るに秋の月を照らす

研まきあはれなる月
研まきあはれなる月

秋の月やあはれなる月
秋の月やあはれなる月

音のなる如く
音のなる如く

澄波

可兮

声々

杜若

ト也

記名

星川

記名

孝次

乙外

記名

記名

記名

志士

石見 英川

イヨ 長絶

松若

記名

私の書名を漢讀哈ふ中しんはよ

京都

改

宝曆庚辰仲秋松を巻の名了

古今家と送之——七月中の二日

玉能と昨の唱らと送之——夏末

精念と今と送之——法苑と今と送之

古江のきんぐと送之——法苑の奇記

と鳥のけしきといふ終り此之理

人とのまゝ又き法邦の文端

思ふと今と送之——法苑と今と送之

碑を今と送之——法苑と今と送之

河の所居と今と送之——法苑と今と送之

みま巻

張負

下

山崎の書名



